

# 基礎的読解力向上策の研究

先端教育研究センター

朝倉智子 飯田吉則 巻下健太郎

本研究所では、平成30年度より継続して読解力向上策の研究を行っている。本稿では、これまでのリーディングスキルテスト（以下、RST）受検結果をもとにした研究から得られた、読解力向上の具体的な取組みとその結果について述べる。また、今年度は新たな試みとして、タブレット端末を用いた読解力向上策の研究やRSTで測定する諸能力と語彙力との相関関係の分析を行った。その結果についても考察する。

〈キーワード〉 読解力 語彙力 リーディングスキルテスト（RST）

## I はじめに

「OECD生徒の学習到達度調査」（PISA2018）の結果から、日本の15歳児の読解力は、「OECD平均より高得点のグループに位置するが、前回より平均得点・順位が統計的に有意に低下」と分析されている。しかし、この結果が出る前から、学校においては読解力の低下が懸念されていた。そこで、本研究所は平成30年度より読解力向上の研究を開始し、成果指標としてRSTを利用することとした。これまでに延べ1,947名がRSTを受検している。この2年間の取組みの詳細については、本研究所ホームページ掲載の研究紀要第124号「RSTを活用した基礎的読解力向上策の研究」を参照されたい。

RSTでは「様々な分野の、事実について書かれている短い文章を正確に読む力」を、6分野7項目に細分化して測定する。本稿ではRSTにおける定義に従って、「短文を正確に読み取れる力」のことを「基礎的読解力」と表現する。

昨年度までの研究から、「基礎的読解力向上には、各教科の教科書において意味や定義が説明されている用語（以下、学習用語）を正しく理解する力が関係する」という仮説が得られた。また、基礎的読解力に関わる以下の課題が明らかになった。

- ・基本的な文の構造の理解（RSTでいう「係り受け解析」）が十分にできていない児童・生徒が全体の4割程度存在する。
- ・小学校の国語の授業において、主人公は誰で何をしたのかといったような基本的な内容について、一読しただけでは理解できない児童が存在する。
- ・「思考力」「判断力」の向上には「推論」の力が関係する。新学習指導要領では「主体的、対話的で深い学び」が求められているが、この「推論」の力がいないため、対話的な学習の場面で話がかみ合わず、思考が深まらない。
- ・基礎的読解力に学年間の差があり、一律の指導では対応できない。
- ・基礎的読解力が身につかないまま進級・進学し、学習に困難を抱える児童・生徒が存在している。

本稿ではこれらの課題に対し行った実践と、その結果について述べる。

## II 研究の概要

今年度の研究の概要は以下のとおりである。

- ・文章の基本的な内容を読み取れない児童に対する有効な改善策を打ち出す。具体的には、A小学校において主語や目的語等を問う問題を作問し、6年生の国語科の各単元で実施する。また、「推論」の能力を伸ばすため、国語科の学習用語の定着、根拠を踏まえた話し合い活動に取り組む。
- ・B中学校のRST偏差値が低い学年に対し、各教科の教科書で使用される学習用語の定着を図り、「推論」の能力を伸ばす。
- ・基礎的読解力が身につかないまま進級・進学し、学習に困難を抱える生徒が在籍するC高校2クラスに対し、個の能力に応じた学習課題を設定できるAI教材を使用し、「係り受け解析」「照応解決」の底上げを図る。
- ・D高校2年生を対象に、RSTと同時にNTT言語基礎研究所の「令和版語彙数テスト」および本研究所作成の調査を実施する。これにより各自の推定獲得語彙数とRST偏差値との相関およびどのような語彙と相関が強いのかを調査する。

なお、今年度の調査協力校の児童・生徒は、成績比較のためにRSTを複数回受検している。ただし、過去問等を用いた指導は全く行っていない。コンピュータ上で行われる試験（以下、CBT）に対する慣れは幾分考えられるが、受検生の偏差値の変化、その間の指導の特徴等を検討することで、効果的な指導方法を探ろうと考えた。

## III 令和2年度の実践と考察

### 1 基礎的読解力の底上げと「推論」を伸ばすための指導

#### (1) A小学校の現状

A小学校において令和元年度5月（5年次）に初めてRSTを受検した際の結果は表1のとおりである。

**表1 A小学校の1回目受検結果（受検者全体における偏差値）**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
1回目	39.9	40.8	41.6	39.4	41.0	40.7

1回目の受検時点では、A小学校児童の偏差値は、同学年の受検生と比較しても全体的に低い状況であった。分野別に見ると、思考力、判断力の基礎となる「推論」の偏差値が最も低く、課題であることが明らかになった。そこで、基礎的な読解力全体の底上げおよび「推論」を伸ばすことを柱として方策を立てることにした。

#### (2) 全体の底上げのための問題作成

1回目の受検結果から、児童が教科書の内容を正確に把握できていない可能性があることが分かった。そこで、児童が教科書を読む際に、教員が作成した問題を使って、内容の正確な把握を促すこととした。作問のポイントはRSTの各分野を踏まえて作成した。以下、所員が問題作成のための研修を行った際に伝えたポイントを示す。

- ・係り受け解析  
文章中の主語や述語、目的語を問う。（どうした？何だ？どんなだ？何が？だれが？何を？何に？）
- ・照応解決  
文章中の指示語が指す内容を問う。（本文のどの部分？）  
文章中で省略されている主語や目的語を問う。（何が？だれが？何を？）
- ・同義文判定  
二つの文を比べて文の意味を考えさせ、同じか、違うか、どのように違うかを問う。

・推論

論の展開に着目させ、根拠を踏まえて説明させる。

・イメージ同定

写真や図表を言葉で説明させたり、文章に合う写真や図表を選ばせたりする。

・具体例同定

文章中で使われている語句の意味に合致する選択肢を問う。

【例題】「係り受け解析」に関する問題

「ふしぎなことに、その行列は、はじめのありが菓に帰るときに通った道すじから、外れていないのです。」(『ありがの行列』(光村図書 国語三下))

問：外れていないのは何か。

例題を参考に、A小学校教員が担当学年の教科書本文を用いて問題を作成した。A小学校では文学的文章の内容把握にも課題を感じていたため、問題作成は説明的文章、文学的文章の両方を対象とした。問題は教科書を正確に読めば解くことができるものを基本とし、発展的なものとして、内容を理解した上で「推論」を働かせる必要があるものも作成した。A小学校では作成された問題を「学習クイズ」と名付けて、単元の最初の授業で活用した。

(3) 「推論」を伸ばすための指導

「推論」は思考力・判断力に最も関わる力であり、全般的な底上げを図る中でも特に伸ばしたい力であるという点で教員の意見は一致していた。しかも、A小学校では他の能力と比して偏差値が低いことも問題になった。そこで、以下の2点の指導を工夫した。

① 国語の学習用語の定着

RSTにおいて「推論」は、「小学校で学習する基本的知識と常識を動員して文の意味を理解する力」とされている。児童が「推論」を働かせる前提となる基礎的知識として、教科書で取り上げられている学習用語の理解は必要不可欠である。そこで、所員がA小学校で使用されている国語の教科書から全ての学習用語を抽出した図1のような一覧表を作成した。A小学校でこの一覧表を共有し、授業を行う際にこれらの学習用語を積極的に使用することで、用語の定着を図った。

② 根拠を元にした話し合い活動

授業内で児童が「推論」を働かせた話し合い活動を行うために、根拠に基づいた発言をすることを重視した。

その際、児童の思考を焦点化するために、筑波大学附属小学校教諭の桂聖氏が提唱する「Whitch型」課題(児童に選択や判断をする機会を与える課題)を用いた。これにより児童には、「わたしは〇〇がいいと思います。なぜなら…」という話形で常に理由や根拠を明らかにして意見表明する習慣を確立することができた。

(4) 結果と考察

対策を始めてから約1年後となる、令和2年度9月(6年次)の2回目受検の結果と1回目からの変化は表2のとおりである。

★基礎的読解力向上のために、学習用語や定義に使われる言葉を正確に理解させ、使わせるようにしましょう。

「1年表紙・タイトル」や「2年表紙・おもしろさ」のように教科書に書かれていないものもピックアップしました。紹介したり、おさえておくとよいでしょう。

教科書科書御用に表示された「国語の学習に用いる言葉」(国語の専門用語)		学習する上で必要な用語 覚えて教えるとうい用語を含む	
教科書	ページ	専門用語	学習に必要な用語(数字はページ)
1上	111	作者	44文・丸・48わけ・26言葉・111表題(タイトル)
1上	111	題名	
1下	117	訳者	16かぎ(一重かぎ、二重かぎ)・19文章・20点・28説明(する文章)・66手紙
2上	24	登場人物	13音読・24変容・32日記・できごと・41順序・52観察・52記録・72おもしろさ・82はじめ・中・おわり・84かんそう・110詩・112対話・124見通しをもつ
2上	36	メモ	
2上	74	あらすじ	
2上	87	質問	
2上	124	筆者	
2上	80	組み立て	
2下	38	話題	24音読げき・27主題・述語・31送り仮名・38理由・73まとめり・げんこう用紙のつかい方
2下	72	出来事	
3上	26	場面	15物語・32国語辞典・33見出し語・五十音順・38音・訓・47段落の中心となる言葉や文

図1 学習用語一覧表

**表2 A小学校の偏差値変化（受検者全体における偏差値）**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
1回目	39.9	40.8	41.6	39.4	41.0	40.7
2回目	43.6	43.8	43.3	43.8	44.7	44.1
変化	+3.7	+3.0	+1.7	+4.4	+3.7	+3.4

全ての分野において偏差値の向上が見られ、目標の一つとしていた基礎的な読解力全体の底上げは達成できたと考えられる。

「学習クイズ」の取組みを継続したことで、教科書に書かれている内容に関して、基礎的な読解のレベルがそろそろようになった。その結果、筆者の主張の是非を問うような発展的な内容の問いに対しても、前提となる根拠を誤読する児童の数が減少した。そして、このことが「推論」力の向上にも繋がったと考えられる。

重点的に向上策を立てた「推論」については、最も偏差値が向上した。これは、先述した二つの指導により、前提として必要となる学習用語の理解が進んだことで、「推論」を働かせられるようになったこと、根拠や理由を意識した話し合い活動によって、論理的に自分の意見を組み立てたり説明したりできるようになったことの成果と考えられる。

他に、A小学校では「具体例同定」に特徴が見られた。「具体例同定」は「具体例同定（辞書）」と「具体例同定（理数）」の2項目に分けられるが、「具体例同定（辞書）」は辞書に示された定義をもとに、その定義に当てはまる用例を選択する能力である。A小学校では5年次からすでに他項目に比べ高い偏差値（43.5）を示しており、6年次では更に向上し、最も高い偏差値（46.7）となった。このような結果が出た要因は、中学年のころから辞書引き指導が継続的に行われていることにある。図2のように、児童が使用している辞書には多くの付箋が貼られており、学習活動において辞書を引くことが日常的になっている。この継続した指導の成果が「具体例同定（辞書）」の結果となって表れていると考えられる。



**図2 児童が使用している辞書**

## 2 各教科における学習用語の定着

B中学校1年生は令和2年度7月にRSTを受検し、結果は表3のとおりであった。

**表3 B中学校1年生受検結果（受検者全体における偏差値）**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
1回目	41.2	42.4	41.1	41.8	41.7	42.4
A小学校	43.6	43.8	43.3	43.8	44.7	44.1

A小学校の2回目の受検結果と比較してみると、B中学校1年生の偏差値が全体的に低いことがうかがえる。1年前に受検した現2年生と比較しても低めでバランスも異なり、前年度の指導を踏襲しても生徒の実態に合わないことが懸念された。そこで、各教科で取り組むこととして、校内で以下のことを共通理解して、全教科で実践を行った。

- ・各教科で使われる学習用語の意味の理解を重視し、確認テストを実施する。
- ・定期テストにおいて、文章が正確に読み取れているか確認する問題を出題する。
- ・記述問題の自己採点が正確にできるように時間を確保する。

学習用語の定着に関して具体的には以下のような指導がなされた。「密度」という用語を例として説明する。

- ① 「密度」という言葉の読み書きの練習をする。
- ② 定義「単位体積あたりの質量を密度という。」から「密度」＝「単位体積あたりの質量のこと」という照応を確認する。

- ③ 学習用語の確認テストにおいて次のような問題を出題する。  
「単位体積あたりの質量を（ ）という。」のように用語を答えとする問題  
「密度とは（ ）である。」のように用語を説明する問題
- ④ 定期テストにおいて、「銅の密度は 8.96 g である。」の正誤を問うなど、定義に照らし合わせて判断する問題を出題する。この場合であれば、「g は質量を表す単位であり、密度を表していない。したがって誤っている。」という解答となる。
- ⑤ 記述問題の自己採点を行い、問題に対して正確に答えることができたか自ら判断する。

今年度2月、1年生が再度 RST を受検し、結果は表4のようになった。

**表4 B中学校1年生の変化（受検者全体における偏差値）**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
1回目	41.2	42.4	41.1	41.8	41.7	42.4
2回目	43.0	44.1	44.7	45.1	44.4	44.6
変化	+1.8	+1.7	+3.6	+3.3	+2.7	+2.2

どの分野においても向上が見られたが、特に「同義文判定」「推論」が大きく向上している。これは先述した取組みが功を奏したためだと考えられる。用語の定着を徹底したことで、生徒は語彙に対して敏感になり、正確な理解が進んだ。その結果として、A小学校と同様、発展的な内容に対しても誤読や理解不足が減少し、「推論」力の向上に繋がったと考えられる。

また、校内の協力体制も読解力向上の大きな要因といえる。これらの実践によって、読解力の育成は国語科の教員の仕事だという意識が変化し、教科の枠を超えて共通の目標に向かう雰囲気生まれている。まずは、全教員が、「教科書を正しく読める力を生徒に身につけさせる」という共通の意識をもって指導に当たり、加えて、問題に対する解き方を重視してきたこれまでの指導についても見直しが図られた。

新たな課題としては、系統的に用語が理解できていないことが挙げられる。たとえば「密度」の定義は「単位体積あたりの質量」とされているが、この定義の中に含まれる「体積」「質量」「単位体積」といった用語の意味を理解せず、定義だけを覚えている生徒がやはり存在する。用語がそれぞれの学年でどのように定義されているのか、いつ学習されているのかを教員が理解した上で授業に臨むことで、更に正確な理解が促せると考える。今後、本研究所では、用語を系統的に整理したものを学校に提供し、教員、生徒の用語に対する理解を促進していきたい。

### 3 タブレット端末を活用した読解力向上策の研究

C高校には、高校入学までに、様々な理由で学年相応の学習に取り組むことができなかった生徒が多く在籍している。当然、高校の学習に対しても困難を抱えている。そこで RST の受検を通して、読解力の面から生徒の実態を明らかにし、高校の学習に対応できる基礎的読解力向上策の研究を学校と協働して行った。向上策の一つとして、生徒が自分の理解度に応じた適切な問題に取り組むことのできる AI 教材を活用した。実践は2年生の二つのクラスで行った。

読解力向上の取組み前のC高校2年生の状況について、1回目の受検結果をもとに確認したい。表5はC高校とB中学校の2年生の偏差値を比較したものである。B中学校の2年生は1年次より読解力向上に取り組んでいることを考慮に入れても、C高校の2年生の読解力は中学生段階にとどまっているといえる。

**表5 C高校（1回目）とB中学校の偏差値比較（受検者全体における偏差値）**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
C高校2年生	45.9	46.9	45.1	45.4	45.0	44.2
B中学校2年生	48.0	47.9	48.8	48.4	47.2	47.2

今回、1回目の受検結果を受け、授業担当者との協議を行い、文章理解の根本といえる「係り受け解析」と「照応解決」について向上策を練ることとした。この二つの項目を選定したのは、その他の項目と相関関係があるため、重点的に指導することで読解力の総合的な底上げにつながると考えたからである。

AI教材は基本的に生徒自身が選んだ範囲からAIが自動的に出題した問題に対し、生徒が自学自習するものであるが、今回の研究では授業担当者が所員との事前協議で検討した分野や範囲を生徒に示し、生徒は自分の理解度に応じた問題から取り組むこととした。取り組む問題の範囲は下限を中学1年生とし、理解度が低い生徒は文の構造や文法用語の確認から始めた。文法に関する基礎的な知識を持ち合わせている生徒は問題演習に取り組んだ。AI教材は生徒の解答状況に応じて問題の難易度等を自動的に調整するので、基礎的な問題を解き終えた生徒は、授業者から指示された範囲内で、自分の理解度に応じた問題に主体的に取り組むことができていた。

C高校では同じ科目の授業が2時間連続(45分×2)で行われているため、1時間目にAI教材を活用した読解力向上に関わる学習、2時間目に教科書を用いた授業という形をとっている。授業を視察した際、生徒は自分の理解度に応じた問題を選択して自学していたが、自分で解けない問題のある生徒には、担当教諭によって個別指導が行われていた。

また、AI教材を用いない授業に関しても、「係り受け解析」と「照応解決」の力をつけることを意識した授業づくりについて担当教諭と協議した。その一例として、古典の授業では、本文中では省略されている主語を全て明らかにし、係り受けが複雑な文は分割し単文にするなどして、生徒に主述の関係を意識させながら口語訳を作る工夫がなされた。

後期の授業で上記の取組みを行い、2回目のRSTを受検した。その結果と1回目の結果の比較が表6である。

**表6 C高校の偏差値変化(受検者全体における偏差値)**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
1回目結果	45.9	46.9	45.1	45.4	45.0	44.2
2回目結果	51.9	48.3	48.6	44.6	46.7	45.1
変化	+6.0	+1.4	+3.5	-0.8	+1.7	+0.9

今回、重点的に対策を行った「係り受け解析」の分野に関して顕著な成果を上げることができた。しかし、一方で「照応解決」については大きな伸びは見られなかった。これは、「係り受け解析」の理解を徹底した結果、「照応解決」に十分取り組むことができなかつたためだと考えられる。そのため、当初意図していたとおり、「係り受け解析」「照応解決」を重点的に向上させることによって読解力の総合的な底上げを達成することはできなかった。

しかし、興味深い結果が見られた。特別な対策を行わなかったにもかかわらず、「同義文判定」の偏差値が大きく上昇したことである。これは、文中の主述の関係を確実に理解することで、文の意味を正確に判定することができるようになったためだと考えられる。この点で「係り受け解析」と「同義文判定」には相関があるといえる。

C高校での取組みを通して、反復して基礎的な内容に取り組むことにより、読解力の根本である「係り受け解析」の力を向上させることができた。文の構造を把握することは教科書の文章を理解するためには必須の能力であり、この能力を育成することで、生徒が高校段階の学習に対応できるようになる。高校入学までに学習習慣が身に付いていない生徒にとって、反復して基礎的な内容に取り組むことは大きな負担である。しかし、今回、タブレット端末およびAI教材を用いた学習を取り入れた結果、生徒からは「自分のペースで取り組むことができる」「苦手な分野を自分で選んで解くことができる」などの感想が出た。このことから、学習に対する積極的な姿勢を引き出すことができたといえる。

今回の結果を受け、タブレット端末を用いて基礎的読解力の向上に取り組むことができる学習コンテンツを学校に提案した。

#### 4 語彙力との相関調査

D高校中高連携クラスの生徒39名が、昨年度、今年度と2回RSTを受検した。RSTで測る諸能力と語彙力との相関関係の分析を行うため、今年度は「令和版語彙数推定テスト」(NTT言語基礎研究所作成、令和2年

6月公開)も使用した。このテストは「知っている」「知らない」の選択式で答えやすいため、生徒はRST受検後でもそれほど負担を感じずに受検が可能だと考えた。

併せて、どのような語彙が読解力との相関が強いのかを計測するため、本研究所作成の調査を実施した。「和語」「漢語」「外来語」からそれぞれ「具体語」「抽象語」を出題し、既習語彙の確認テストになってしまわないよう、出題する語彙は過去の大学入試センター試験本文(国語・現代文)から選定した。また、CBTで実施する他の二つの調査と形式を統一するため、GoogleFormを利用して作成した。

「令和版語彙数推定テスト」も本所作成の調査も、生徒が「知っている」と回答しても、本当に理解しているのかを把握するためには更なる調査が必要になるという問題点があるが、RSTとこの二つの調査から以下の4点が見えてきた。

(1) 文系・理系の伸びの違い

2回の受検結果は表7のとおりである。1回目(1年次)は令和元年6月、2回目(2年次)は令和3年2月なので、約1年半高校での学習を積んだ後ということになる。「同義文判定」「具体例同定」では伸びが見られるものの、「係り受け解析」「照応解決」「イメージ同定」では若干下がっている。元々の成績が高めだった(=伸びしろが小さい)こともあるが、C高校のような劇的な伸びは見られず、やはり読解力については、向上を意識して取り組まないと、単に学年が進んでも伸びるものではないということがうかがえる。

**表7 D高校の受検結果(受検者全体における偏差値)**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
1年次	56.6	55.5	55.3	53.2	56.3	53.2
2年次	55.8	54.9	57.1	53.2	55.8	54.7
変化	-0.8	-0.6	+1.8	0	-0.5	+1.5

受検者は中高連携クラスの生徒であり、二つの中学校から進学してきているものの、高校1年次は同じカリキュラムで学習している。学力差の小さい生徒たちの集まりで、RSTについても標準偏差は小さかった。今回も前年度に比して標準偏差が開いた感はないのだが、興味深かったのは、文系と理系の変化の違いである。表8を参照されたい。

**表8 D高校の文理別受検結果(受検者全体における偏差値)**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
文系	-1.2	-0.7	+1.7	-1.4	-1.3	+2.5
理系	0	-0.4	+1.9	+3.4	+1.3	+0.9

文系、理系に分けて各項目の伸びをまとめたものである。興味深いのは、理系における「推論」力の伸びである。クラスの50%の生徒が1年次より「推論」の偏差値を伸ばし、平均でも+3.4と大きく伸びている。「推論」は思考力・判断力に最も関わる力であるが、昨年度までの研究結果から、暗記頼みの学習スタイルでは向上しないことが分かってきている。理系の中心となる数学・理科といった教科では、単に「覚えただけ」では対応できない学力が求められることから、理系の生徒の方が「推論」力が向上したのではないかと考えられる。決して文系教科が暗記頼みの教科というわけではないが、文系の「推論」力に若干ではあるが低下が見られることから、生徒の学習スタイルが暗記に走る傾向になっている可能性があり、今後の指導の中で意識していかなければならないポイントである。

(2) 獲得語彙数と読解力の相関

先述した「令和版語彙数推定テスト」によって、今回RSTを受検した生徒の獲得語彙数を推定した。その結果、平均は約56,000語であった。推定獲得語彙数が約98,000語もあった文系の生徒は、確かにRSTの偏差値も60台を並べ全体的に高めであったが、最も伸ばしてほしい「推論」力においては偏差値55と平均を少し上回る程度であった。「推論」力の上位20%を抽出して語彙数の平均を算出すると、約58,800語と平均を少し上回る程度であり、やはり語彙数との相関は見られなかった。実際の各項目の相関は表9のとおりであり、獲得語彙数が多いことが読解力の高さに直結するとは言えなかった(むしろ、照応解決で

は、負の相関が見られる結果となった)。

**表9 D高校の各項目と推定語彙数との相関係数**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
相関係数	0.17	-0.3	-0.1	0	0.1	0.1

※相関係数とは、二つの確率変数の間にある線形な関係の強弱を測る指標。関係性の強さを-1から+1の間の値で表す。0.2以上が「相関あり」とされ、0.4以上は「中程度」、0.7以上は「強い」相関とされる。

(3) 相関が見られる語の特徴

昨年度、小学生に対する調査から、抽象語との相関が高いことが予想されたので、本研究所作成の調査では、意図的に「和語」「漢語」「外来語」それぞれ「具体語」「抽象語」から同数ずつ出題し、相関を調べた。結果、相関が見られたのは1語のみであった。この1語だけで「漢語の抽象語との相関が強い」と述べてしまうことは短絡的であるが、今回の調査から以下のことが分かった。

- ・生徒は、外来語（カタカナ語）よりも漢語を苦手に行っている傾向がある。
- ・認知率の高い語句になるほど、読解力との相関は見られない。（相関の見られた語を「知っている」と回答した生徒は、調査語句中最低の23%しかいなかった。）

(4) 文章に向き合う態度との相関

(3)で述べた本研究所作成の調査で、文章に向き合う態度を問う質問をした。その結果、「文章を読んでいて分からない語句が出てきたらどうするか」という質問の回答において、読解力との興味深い相関が見られた。選択肢は「辞書で調べる」「インターネットで検索する」「誰かに質問する」「前後の文脈から判断する」「何もしない」の五つ（複数回答可）であるが、読解力と最も相関があったのは、「前後の文脈から判断する」という回答である。語彙力の全ての項目において、表10のような中程度の相関が見られた。

**表10 「前後の文脈から判断する」という回答と各項目との相関係数**

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定
相関係数	0.51	0.41	0.43	0.31	0.38	0.48

令和2年12月、文部科学省がデジタル教科書使用時間制限撤廃を発表した。文部科学省予算に、デジタル教科書の導入を促進するための費用22億円が計上されており、今後はデジタル教科書の普及が拡大していく可能性がある。このような教育環境の変化を念頭に、今後、基礎的読解力向上をどのように図っていけばよいのかを考えなければならない。

文部科学省の調査によると、デジタル教科書の発行は、令和2年度は小学校用約94%、中学校用約25%のところ、令和3年度はともに約95%に達する見込みである。GIGAスクール構想が進む中で、新学習指導要領全面実施と合わせて、高校も例外ではなくなると予想される。

RST 考案者の新井氏の他に、上智大学教授の辻元氏も引用されているアメリカでの実験がある。マイアルとドブソンの2名が、ハイパーリンクの有無を変えて少し難解な文章を被験者に読ませ、どちらがよく内容を理解したかを調査したものである（2001年）。ハイパーリンク有のグループの方が読了に時間を要するのは想定内であるが、読了後の「内容が理解できたか」という質問に対して「難しかった」と答えた割合が、ハイパーリンク無しのグループでは10%だったのに対して、ハイパーリンク有りのグループでは75%に及んだ。つまり、利便性を増し読解の手助けをするはずのハイパーリンクは、逆に読解を阻害してしまっているということである。

文章中に難解な語句が出てきた際に、辞書を引かなくても意味が分かるという点でハイパーリンクは便利である。しかし、必要以上にリンクに頼ると、文そのものの理解を妨げてしまい、ひいては読解力の低下につながりかねない。

先述したように、「前後の文脈から判断する」ことが読解力向上につながると考えられるため、児童・生徒が安易にハイパーリンクに頼る癖をつけないよう、まずは前後の文脈から判断しながら読んでいくように仕向ける指導が必要である。

## IV 今後の取組み

基礎的読解力向上策の研究に取り組んで3年目となる今年度は、小中高全ての校種に対して読解力向上策を提案し実践を行うことができた。この実践を通して、短い時間であっても継続して対策に取り組むことで、RSTの基礎的な分野である「係り受け解析」「照応解決」「同義文判定」にまつわる能力を伸ばすことができることを明らかにした。また、手立てを講じていくことで、応用的な能力である「推論」力も向上が見られた。読解力を意識した取り組みを重ねていくことで、読解力は向上させられるということが明確になったと言える。

「イメージ同定」「具体例同定」を含め、RST各分野の能力を向上させていくために、次年度は、作問、発問のポイントを分野ごとに示し、具体的問題例を作成する予定である。今年度、第69次福井県学力調査(SASA2020)においても基礎的読解力に関連した問題を出題している。本研究所ホームページにて公開されている「SASA2020報告書」に詳しいので、こちらも参照されたい。

「単に学年が進んでも読解力は伸びるものではない」と述べたが、例外の分野が一つあった。「係り受け解析」である。「係り受け解析」の偏差値を比較すると、年齢が上がるごとに伸び幅が大きくなっており、読解力向上を目指す対策以外にも能力を高める要因があると考えられる。一つの仮説として、年齢が上がっていくことで自然に増加していく語彙および文構造の理解が関わっていることを挙げたい。文を理解するためには、語彙および文構造両方の知識が必要になる。小学校段階ではこの両方が不足しているため、語彙も文構造の知識も同時に習得していく必要があり、結びつく段階までは達しないが、高校段階になると、ある程度語彙数も増え文構造の知識も身につけてきているため、二つがかみ合ってきて「係り受け解析」の能力、ひいては読解力全般が向上するのではないかと。

そこで、次年度は、獲得語彙が読解力に及ぼす影響について研究を行う予定である。単に獲得語彙数が増えても読解力は向上しないことは今年度の調査で見えてきている。小・中学校でも同様な結果が得られるのか、また、どのような語彙と相関が強いのかを更に調査し、基礎的読解力向上のために身につけるべき語彙について、具体的に抽出した用語集を作成する予定である。また、「令和版語彙数推定テスト」を作成したNTTコミュニケーション科学基礎研究所との連携も視野に入れて、研究を進めていく。

併せて、次年度は県内の1人1台端末整備が終わり、ICT活用が本格化する。デジタル教科書の使用など、今後の教育環境の変化も視野に入れながら、読解力向上に取り組んでいく。

### 《参考文献》

- 文部科学省・国立教育政策研究所(2019.12)「OECD生徒の学習到達度調査2018年調査(PISA2018)のポイント」
- 文部科学省・デジタル教科書の今後の在り方等に関する検討会議(2020.12)「学習者用デジタル教科書の使用を各教科等の授業時数の2分の1に満たないこととする基準の見直しについて」
- 中央教育審議会(2021.1)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」
- 新井紀子(2012)『ほんとうにいいの？デジタル教科書』岩波ブックレットNo.859
- 新井紀子(2018)『AIvs教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社
- 新井紀子(2019)『AIに負けない子どもを育てる』東洋経済新報社
- 宇治黄檗学園(2020)「基礎的な読む力(読解力)の向上」教育研究情報VOL.52
- 「研究福井の学力向上」上中下(2020.7.5,12,19)福井新聞
- 座談会「子どもの読解力低下問題を考える」(2020.3.23)日本教育新聞
- 辻元(2014)「デジタル教科書の問題点—情報量の多さは教育効果につながるか—」コンピュータ&エデュケ

ーション 36

○論説 『読解力の向上』 欠かせぬ (2020. 8. 13) 福井新聞

○本研究所 (2020) 「RST を活用した基礎的読解力向上策の研究」 福井県教育総合研究所紀要第 124 号